In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	Not の文照応的用法
Author	関, 茂樹
Citation	人文研究. 59 巻, p.126-139.
Issue Date	2008-03
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	塩出彰教授 ： 湯川良三教授 ： 細井克彦教授 ： 市川美香子教授 ： 広瀬千一教授 ： 浅岡宣彦教授退任記念号

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

人文研究　大阪市立大学大学院文学研究科紀要
第59巻　2008年3月　126頁～139頁

Not の文照応的用法*

関　　茂　樹

本論文は、先行文の内容を受けて文の代用形として用いられる not を含む文の諸特性を考察するものである。文の照応形として用いられる not を含む文に関する従来の分析は I hope not. I'm afraid not. などの構文に限られており、不十分であった。この論文では、問題とされる構文には、2種類があることを主張する。すなわち、断言タイプと留保タイプである。断言タイプの場合は、not を含む否定節が話し手の主張部分を担っている。一方、留保タイプの場合は、not を含む否定節に話し手の主張部分があるのではなく、先行文の発話内容が妥当であることの留保条件が表されている。本論文では、小説などから多くの実例を引用しつつ、2種類の構文の諸特性を意味的・統語的な観点から分析し、その区別が妥当であることを明らかにしている。

1．序

この論文では、否定辞 not を含み、文構造上は簡略化されたようにみえる文の特性を考察する。このタイプの否定文は、対話において相手の発話に対する応答文として現れるのが典型である。例えば、(1)では、不動産の取引のことでジェイソン・ガレスピーに会わなければならないという息子の発言に対して、母親が「感謝祭の日に外出はいけません」と言って反対している状況を表わしている。(2)では、人は見かけによらないもので、恐喝があったのかもしれない、という発言に対して、「ララビーに限って、そんなことはない」とセルビーが弁護している。いずれも先行の発言内容に対する話し手の抗議・反論を表わす否定文を含んでいる。文脈から判断して、前の発話に対する留保・譲歩といった陳述緩和のはたらきとは別であることは明らかである。しかしながら、否定辞 not が文頭に現れるこのタイプの文は、先行の発言内容に対する話し手の抗議・反論といった断言に限られるわけではない。先行発話に対する留保という陳述緩和のはたらきもあることを以下で論じたいと思う。まず、関連する先行研究をみることにしよう。

(1)　"... I've got to see Jason Gillespie about a real estate deal."
　"Not on Thanksgiving, Stephen!" Ma Freeman protested.
　(E.S. Gardner, *The D.A. Calls a Turn*)

(2) "People do funny things. There may have been blackmail mixed up in it."
"Not with Larrabie," Selby said. "He's too absolutely genuine. He was busy making the world a better place to live in."
(E.S. Gardner, *The D.A. Calls It Murder*)

2．先行研究

節の代用形の not を含む文の例としてしばしば言及されるのは、次のような文である。

(3) "Will he come?" "I hope not."
(Jespersen (1977：299))

(3)の I hope not. は先行文の内容を否定的に受けており、I hope that he will not come. と知的意味で等価である。また、節の代用形の not は、叙述内容に対する話し手の心的態度を表わす法副詞（modal adverb）と共起できることもよく知られている。次の(4B)は(4B')と知的意味で等価である。

(4) A : Will John come to the party?
B : {Certainly/Probably/Possibly/Perhaps} not.
B' : {Certainly/Probably/Possibly/Perhaps}, he won't come to the party.

同じように節の代用形の not を含んでいるけれども、本論文が対象とする構文の先行研究は、意外なことに、かなり少ない。包括的な英文法書として知られている Huddleston and Pullum (2002) には、事実の指摘があるだけである。下記の例文が同書（p.849）にあげられており、否定辞 not はそれぞれ I won't leave, I won't go, there aren't many rhinoceroses left. を表わすと述べられている。しかしながら、本論文の 3 節以下で論じるように、実際には、(5i)と(5ii, iii)とは別のタイプに属する否定文であることに注意する必要がある。

(5) i A : I think you should leave now.
B : Not without my money.
ii I won't go, not even if they beg me.
iii There aren't many wild rhinoceroses left, not in Africa or in Asia.

次にもう一つの先行研究である安井・中村（1984）を取り上げたいと思う。やや長いけれど

も関連する部分を引用する（例文の番号(105)は、原文の番号を表わす）。

(6)＝(105)　Jo, you can't mean that. Not when I love you so much.

（ジョー、本気じゃないよね。本気なはずないよ、ぼくがあなたのことをこんなに愛しているのだから）

この(105)の場合、問題の not は、It cannot be the case that you mean that. のごときものを意味していると思われるが、この解釈が正しければ、この not は後続の when 節を修飾（または、否定）しているのではなく、むしろ、when 節が not（で代表されている節である it cannot be the case that you mean that）を修飾しているのであると考えなければならない。その意味において、ここで生じているのは節内の省略というよりも、むしろ、節のゼロ代示形に not を添わせた形ではないかと考えることが可能であると思われる。となれば、この場合の not は、上の§7で述べるところのあったもの、すなわち、節の代用形の not にほかならないものであることになる。節の代用形は、so であれ、not であれ、必ず対比要素を伴う旨を§7で述べているが、この点から見ても、上の(105)の not は節の代示とされるに足る資格を十分に備えているであろう。この場合、when 節が対比を担っているからである。　（安井・中村（1984：287－288））

ここで重要であるのは、問題の not は節の代用形としての役割を果しているという点である。これは例文(1), (2)および引用例文(5), (6)にともに当てはまる。一方、両者の相違はどうか。(1), (2), (5i)は、発話者が異なり、話し手が相手の発言を受けた上で、それに反論するという形をとっている。引用した例文(5ii), (5iii), (6)では、二つの文の発話者は同じであり、後続の否定を含む文は、自分の先行の発話内容が妥当であることの条件を述べているものと解される。この先行発話が妥当であることの条件が、上の引用における「対比を担っている」という役割と結びつくことになる。類例をみることにしよう。

(7)　...He turned to Perry and said, "I m wondering if *you* knew the dead man, Doctor."
"No, I'd never seen him in my life－not that I know of."
(E.S. Gardner, *The D.A. Calls It Murder*)

(8)　"Wasn't that rather an isolated place for you?" Selby asked.
She smiled. "During certain seasons of the year it wasn't at all isolated. Not when I was there...."
(E.S. Gardner, *The D. A. Breaks an Egg*)

(7)では、セルビーが医師のペリーに死亡した男を知っているかどうかを尋ねている場面で、

ペリーが「これまでに一度も会ったことはない、わたしの知っている限りではね」と応じている。(8)では、Windrift は寂しいところではないのか、というセルビーの問いに対して、カー夫人が「1年のある時期は（牧場が観光客でごった返すほどで）寂しいという感じはありません。私がそこで暮らしていた頃には、そんな感じはありませんでした」と答えている。例文(1), (2)とは異なり、いずれの例でも、二つの文の発話者は同一であり、二番目の否定文(節)は先行の発話が妥当であることの留保・但し書きの役割を果している。つまり、発話者が主張したいのは、先行する否定文の内容であり、後続の節の内容ではない。

二つのタイプの相違をまとめると次のようになる。二つのタイプはともに節の代用形である not を含み、この not は簡略化されてはいるけれども、一つの否定命題を表わす。(1), (2), (5i)のタイプは、節の代用形である not を含む否定節が話し手の主張（反論・拒否）を表わしている。(5ii), (5iii), (6)－(8)のタイプでは、節の代用形である not を含む否定節に話し手の主張部分があるのではなく、この否定節は先行文（発話）の意味内容が妥当であることの留保・但し書きの役割を果している。[1]

3．二種類の否定節

本論文では、節の代用形である not を含む否定節には、二種類のタイプがあることを論じたいと思う。以下、(1), (2), (5i)のような否定節を含む文を断言タイプ、(5ii), (5iii), (6)－(8)のような否定節を含む文を留保タイプと呼ぶことにする。分かりやすく図式化すれば次のようになる（下記で S は文、XP は任意の句範疇、NEG は否定要素（not に加えて hardly, scarcely なども含まれる）をそれぞれ表わす)。実際には、S_1 と S_2 が独立文ではなく、等位構造をなす場合もあるが、説明の便宜上(9)のように表示する。[2]

(9) i 断言タイプ：[...]$_{S1}$ [... Not XP ...]$_{S2}$
Not XP は話し手の主張部分（反論・拒否）を担っている
ii 留保タイプ：[... (+NEG) ...]$_{S1}$ [... Not XP ...]$_{S2}$
XP は先行の否定発話 S_1 が適切であるための留保条件を表わす
S_1 には否定文が現れる

次の例は、Nell が George に手紙を書くべきか否か悩んでいる状況を描出話法を用いて示している。付加節では先行の自分の発話内容に対する留保が表わされている。留保タイプの典型は対話にみられるけれども、聞き手の存在が義務的であるわけではない。

(10) Or perhaps she wouldn't write to him－not till she had seen Vernon. Would Vernon be

very angry? How terrible it all was.

The tears came to her eyes. She sobbed: "It's unfair－it's unfair...."

(M. Westmacott, *Giant's Bread*)

二つのタイプは、強勢の配置の点でも異なっているので、簡単にふれておきたい。断言タイプの場合は、名称からも予測されるように、否定辞 not は十分な強勢を必要とする。これに対し、留保タイプでは否定辞 not の強勢は、通例、弱い。次の文で大文字は強い強勢を受ける部分を、～は弱い強勢の音節をそれぞれ表わす。

(11) A : "But you're going to do that tonight."

B : "NOT without the papers."

B' : ??"Nõt without the papers."

(12) A : "Let the police take care of him."

B : "It isn't that easy. ??NOT on the border."

B' : "It isn't that easy. Nõt on the border."

先行の発話の妥当性についての留保・但し書きという役割は、否定文に限らず広くみられる現象であり、肯定文を用いて但し書きを表わす場合も同様に考えることができる。例えば(13)は、some を使った否定文による但し書きの別の例である。「警察の捜査に新聞記者が同伴することに、納税者の理解は得られないだろう。少なくとも批判する者がいるだろう」といった意味を表わす。(14)は「やっかいなことから逃れようとしている、少なくともそうしようと努力している」ことを表わす at least を使った例である。(15)では、「リムリーはこれまでいつも正直だった、少なくともわたしに対しては」という留保を含んでいる。

(13) "The taxpayers wouldn't like it if we took a newspaper reporter along," he said, "－some of them wouldn' t."

(E.S. Gardner, *The D.A. Draws a Circle*)

(14) "Hell, no," I told her. "I'm getting out of trouble－at least I m trying to."

(A.A. Fair, *Bachelors Get Lonely*)

(15) I said, "How about Pittman Rimley, can you trust him?"

"So far he's always been on the square－with me."

(A.A. Fair, *Give 'Em the Axe*)

留保タイプの否定節の役割を端的に示す例をみてみよう。(16)では、問題の否定節が生じて

いるのに対し、(16')では、通常の従属節が生じている。(16)は「女はいなかったよ、ジョージ。ここに着いたときにはな」という警官の発言の例である。少なくとも自分たちが着いた時点では、女は見かけなかった、という留保の意が表わされている。一方、(16')は、「ここに着いたときには、女はいなかったな、ジョージ」という過去の事実の報告を表わしている。先行の発話内容（存在文の内容）に対する留保という意味合いは相対的に弱いと言えよう。

(16) The officer turned back to Crane. "There wasn't any woman, George, not when we got here. What happened?"

(E.S. Gardner, *The Case of the Buried Clock*)

(16') The officer turned back to Crane. "There wasn't any woman, George, when we got here. What happened?"

さて、否定辞 not を含む否定節が前言の留保ではなく、それ自体が発話者の主張部分となる断言タイプの文に戻ることにしよう。上でみたように、留保タイプの場合は、先行文は否定文である。つまり、否定文が繰り返されることになる。これに対し、否定節が発話者の主張部分を担う断言タイプの場合、先行文は、通例、肯定文あるいは疑問文である（否定疑問文の場合もあるけれども、疑問文に含めて考える）。(17), (18)では肯定文、(19), (20)では疑問文が先行文として生じている。

(17) "... I thought you were all going away."

Missy said bluntly, "Not until we get the blue marble."

(D.B. Hughes, *The So Blue Marble*)

(18) "If anything should happen to me, he'd find me."

"Not if I got rid of you, Johnnie," she said with certainty.

(D.B. Hughes, *"Johnnie"*)

(19) "... How about it, George, can you describe this woman?"

George Crane said pointedly, "Not while these guys are here."

(E.S. Gardner, *The Case of the Buried Clock*)

(20) "Well, is that going to disqualify you from doing what we want?"

"Not unless you think it does...."

(E.S. Gardner, *The Case of the Lucky Loser*)

このタイプの場合は、対話において相手の発話に対する話し手の否定的な態度の表明が多くみられるけれども、同一人物が自分の発話に対する態度表明の場合もあり得る。

(21) "... We may be able to help you, sister, but not unless you come clean."
(E.S. Gardner, *The Case of the Stuttering Bishop*)

二つのタイプを分けるもう一つの特性として、発話者の主張を否定節が担う場合は、この節に強意語を含むことができるということがある。例えば、(22), (22')には、強意語句の in the least, in the slightest が生じることができる。

(22) "... I had heard in a roundabout way of your wonderful power－ought I to tell you how－does it matter?"
"Not in the least if it has nothing to do with the case," replied Carrados.
(E. Bramah, *Max Carrados*)

(22') "... I had heard in a roundabout way of your wonderful power－ought I to tell you how－does it matter?"
"Not in the slightest if it has nothing to do with the case."

次の例でも文副詞の certainly により、否定が強調されている。中期英語と近代英語の特定の語末子音は、「例外的な」音変化法則の仮定という、その場限りの解決法では、説明できないことが述べられている。

(23) ... How are we to account for the M.E. and Mod. Eng. forms with *-k*? Certainly not by assuming an 'exceptional' change of －*c* (front-stop) to (k)....
(Wyld (1920：146))

逆に、断言タイプは陳述を緩和するはたらきをもつ at least, at any rate, anyway などとは折り合いがつきにくい。

(24) "... I thought you were all going away."
?? Missy screeched, "{At least/At any rate} not until we get the blue marble."

一方、留保タイプの場合は、否定節と陳述緩和的な要素は自然に共起することができる。

(25) "There wasn't any woman, George, not when we got here, {at any rate/anyway}. What happened?"

(25') "There wasn't any woman, George, at least not when we got here. What happened?"

(26)では、長い間拘束され、衰弱してしまったエレンにステットソンが殺されたことを知らせるわけにはいかないこと、少なくともエレンの体調が回復するまで、当分の間は、伏せておくことにした、という語り手の思いが述べられている。先行文の内容（語り手の決意）に対する留保を示すものであり、留保条件が複数述べられているという特徴がある。また、上述の例のように、対話にみられる応答ではなく、小説の語りにみられる描写文であるという点でも興味深い。

(26) I made up my mind then and there that, if we got out of that room alive and free, Ellen was never to know of the death of Stephanie Stetson. At least－I amended it－not for a long time, not until she was strong.

(H. Roth, *The Content Assignment*)

なお、否定節の反復の可能性は、(26)の例のような留保タイプに特有というわけではなく、断言タイプの場合にもみられることを付け加えておきたい。

(27) No one moved toward him. The goons might be brave in a dark alley but not in the Hotel Chenoweth. Not on the wrong side of their border.

(D.B. Hughes, *The Candy Kid*)

(28) "You think I should talk to him?"

"Not until you're ready to talk, Jo." She shook her head gravely. "Not while you're covering up this way. He's no dope."

(D.B. Hughes, *The Candy Kid*)

英語では動詞要素が繰り返される部分を照応詞の so あるいは that で置き換えることは許されない。節の代用形としての役割を担う否定辞の not とは対照的である。要素の書き換えを含む下記の文の許容性の相違を比較されたい。[3]

(29) For the first time in hours, Johnnie remembered the bomb cigar in his pocket. Remembered it none too comfortably....

(D.B. Hughes, *"Johnnie"*)

(30) She knew one thing, knew it with cold terror stifling her heart. If he had been working with the X and had made a mistake, the organization could and would repudiate him....

(D.B. Hughes, *The Bamboo Blonde*)

(29') For the first time in hours, Johnnie remembered the bomb cigar in his pocket.
{*So/*That} none too comfortably.
(30') *She knew one thing, {so/that} with cold terror stifling her heart.

4．notの後続要素の統語特性

これまでの分析で、節の代用形のnotを含む否定節には、二種類の意味的な役割があることを明らかにしてきた。次に、否定辞notに後続する要素の統語範疇とその特性について簡単にまとめておきたい。否定節の構造を任意の句範疇XPを含む形でNot XPとして表わせば、名詞句、that節、前置詞句、副詞句がこの構造に現れることができる。

(i) XP＝NP（名詞句）の場合：

この場合は、節の代用形のnotを含む上掲の否定節の場合とは少し異なることに注意する必要がある。例えば、例文(31)をみてみよう。(31)でNot some things.という文のNotが表わしているのは、Time doesn't healという目的語を欠いた不完全な節であり、上の節で取り上げたような完全な節の代用形とは異なる。上の例文(28)を再掲し、比べてみることにしたい。この例文で、Not until you're ready to talkのNotと、Not while you're covering up this way.のNotはともに、You should not talk to him.という完全な節（文）を受けている。

(28) "You think I should talk to him?"
"Not until you're ready to talk, Jo." She shook her head gravely. "Not while you're covering up this way. He's no dope."

したがって、XP＝NP（名詞句）の場合は、否定辞のnotは先行節の準代用形と呼ぶのが正確であるかもしれない。同じことは例文(32), (33)にも当てはまり、先行節の準代用形を復元したもとの文を角括弧で示す。なお、否定節の役割としては、(31)は断言タイプ、(32), (33)は留保タイプに対応する。

(31) "My dear." Her father went over to her. "Calm down, child. Don't be so strung up. Time heals everything."
"Not some things. What shall we do? Oh! what shall we do ?"
(A. Christie, *Ordeal by Innocence*)
(31') [Time doesn't heal (some things).]
(32) "I've been broke," I said.

"I know, lover, but you're young, and you have brains. Bertha didn't have brains, not the kind you have."

(A.A. Fair, *Gold Comes in Bricks*)

(32') [Bertha didn't have brains, Bertha didn't have (the kind you have).]

(33) "You'll like it less when the police go over your car and find Bonnie Lee's fingerprints in it," Skye said sharply. "You may think you've got rid of them all but you can't, not the latent ones."

(D.B. Hughes, *The Expendable Man*)

(33') [You can't get rid of them all, you can't get rid of (the latent ones).]

(ii) XP＝that 節の場合：

句範疇 XP が that 節として具現する not that ... の文には構造上の曖昧さがある。一つの可能性は、先行の発話を受ける場合つまり節の代用形の場合であり、本来の文を復元すると下記の(34')－(36')を想定できる。

(34) "And there wasn't any Peeping Tom?" I asked.

"Not that I could see."

(A.A. Fair, *Bachelors Get Lonely*)

(34') [There was not any Peeping Tom that I could see.]

(35) He pulled a cigarette case from his pocket and lit a cigarette.

"Any motive?"

"Not that anyone knows."

(A.A. Fair, *Crows Can't Count*)

(35') [There was not any motive that anyone knows.]

(36) "Did he have a funny hat?"

"Not that I could see."

(A.A. Fair, *Bachelors Get Lonely*)

(36') [He did not have a funny hat that I could see.]

もう一つの可能性は、上述の文とは異なり、先行の発話内容を必ずしも直接的に受けない場合である。したがって、先行節の代用の用法ではないことに注意を要する。もとの文の構造として、It is not the case that... を想定できる。下記の(37')－(39')の括弧表示を比較されたい。

(37) "You're jealous," said Jane quickly.

"You admit then, there's something to be jealous of? Not that Vernon loves you. He doesn't. He never would. It's you who want to get hold of him."

(M. Westmacott, *Giant's Bread*)

(37') [It is not the case that Vernon loves you.]

(38) Jose turned to follow Pablo, not that he needed the kid to show him upstairs....

(D.B. Hughes, *The Candy Kid*)

(38') [It was not the case that he needed the kid to show him upstairs.]

(39) ... Steve told the truth. Not that they could recognize it.

(D.B. Hughes, *The Davidian Report*)

(39') [It was not the case that they could recognize it.]

(iii) XP＝AdvP（副詞句）の場合：

次に、否定辞と副詞が共起する場合を考察してみよう。外見上は単純であるけれども、誤って解釈することが十分にあり得る文である。

(40) If only there were someone he could tell his story to, someone who could advise him. There was no one, not here in Phoenix. At Med Center, yes; there were half a dozen colleagues....

(D.B. Hughes, *The Expendable Man*)

(41) "... If I cheat on you and don't take the sedative, you won't know anything about it－not officially."

(A.A. Fair, *Double or Quits*)

(42) He was shaking his head even before I'd finished speaking.

"I can't do that, not ethically."

"Why not? You haven't even examined me yet."

(A.A. Fair, *Double or Quits*)

(40)は場所の副詞表現（here in Phoenix）を含む例であり、とくに問題はない。残りの2例についてはどうであろうか。(41), (42)は、原文では連続した談話の一部を引用したものである。いずれも外見上は否定辞が副詞と結びついた文を含んでいるようにみえる。「公式的にではなく／非公式に」、「倫理的にではなく／非倫理的に」といった読みである。単純な形式だけに、誤解しやすい点であるので、少し付言しておきたい。これまでの分析から明らかなように、この場合の否定辞は節と照応的な not である。したがって、(41)では、話し手(I)が処方された鎮静剤を飲まないということがあっても、聞き手である医者は、それを「職務上は知り得ない」

こととして容認するように求められている。(42)は(41)を受けた発話であり、話し手（医者）は「それを容認することは、職業倫理上できない」と拒否している。(42)の該当部分を復元すれば[I can't do that, I can't do that, ethically.] のように表わされる。いずれの場合も副詞は否定の作用域（scope）に含まれていないこと、換言すれば、副詞は否定の作用域の外にあることを理解することが肝心である。

(iv) XP＝PP（前置詞句）の場合：

前置詞句の例はこれまでの節で対話に現れる場合を主にあげてきたが、小説などの語りの部分に現れる例も若干示したいと思う。[4]

(43) ... Steve knew he couldn't touch half of it, not at this hour and with his stomach nerves like guitar strings, but Rube could eat double....

(D.B. Hughes, *The Davidian Report*)

(44) ... He certainly wouldn't be helping Garth out any longer, not after what had been done to him.

(D.B. Hughes, *The Bamboo Blonde*)

(45) For long moments he sat there on the road, trying to arrange his thoughts. He couldn't leave town, not without telling the family why, not without spoiling Clytie's wedding....

(D.B. Hughes, *The Expendable Man*)

5．結　語

これまでの分析をまとめると次のようになる。節の代用形である not を含む否定節は、法副詞（modal adverb）などの法表現（モダリティ表現）との共起関係を除き、これまで十分に分析がなされてきたとは言い難い。この論文では、節の代用形である not を含む否定節には二つのタイプがあることを論じた。第 1 のタイプは、節の代用形である not を含む否定節が話し手の主張部分（反論・拒否）を担っている。第 2 のタイプは、節の代用形である not を含む否定節に話し手の主張部分があるのではなく、先行文（通例は否定文）の発話内容が妥当であることの留保・但し書きの役割を果している。第 1 のタイプのような否定節を含む文を断言タイプ、第 2 のタイプの否定節を含む文を留保タイプと呼ぶことができる。両者の特性を分かりやすく図式化すれば次のようになる（下記で S は文、XP は任意の句範疇、NEG は否定要素（not に加えて hardly, scarcely などを含む）をそれぞれ表わす)。

(46) (i) 断言タイプ：[...]$_{S1}$ [... Not XP ...]$_{S2}$

Not XP は話し手の主張部分（反論・拒否）を担っている

Not に強い stress が置かれる

S_1には肯定文、疑問文が現れる

先行発話 S_1は、他人の場合と自分の場合との 2 通りある

(ii) 留保タイプ：[.... (+NEG) ...]$_{S1}$ [... Not XP ...]$_{S2}$

XP は先行の否定発話 S_1が適切であるための留保条件を表わす

S_1には否定文が現れる

Not に弱い stress が置かれる

先行発話 S_1は、他人の場合と自分の場合との 2 通りある

【注】

* 節の代用形である not を含む否定節には、二種類の役割があることを最初に筆者に示唆してくださったのは廣瀬幸生氏である。例文のチェックは Michael Cox 氏にお世話になっている。ここに記して感謝の意を表したい。

1）否定辞の not が節の代用形として用いられるのではなく、後続の構成要素が否定の作用域（scope）に含まれる場合があり、通例は、対比の解釈が可能である。

(i) I said, "Robert Cameron had his gloves on when he fired the shot."
"At the murderer?"
"Not at the murderer, Bertha, at the crow."
"At the crow?" Bertha screamed at me....
(A.A. Fair, *Crows Can't Count*)

(ii) I got up and met a pair of hostile gray eyes, glanced down and saw that Harmley was looking, not at Walter, but at me.
(A.A. Fair, *Double or Quits*)

また、not が節の代用形として用いられる場合と外見上は似ている述部否定の場合も区別する必要がある。

(iii) "What kind is this Dorothy Grail?"
"Class. Not too old, not too young, not too fat, not too skinny...."
(A.A. Fair, *Double or Quits*)

2）問題の構文は、通例、先行の発話に対する応答として現れる。つまり、文脈指示であり、言語外のコンテクストに基づく場面指示の例ではない。例外的に、発話内容ではなく、相手の行為に対して発話されることがある。次の文は場面指示の例とみることができる。

Sellers stopped, looked around, fished a cigar from his pocket, put it in his mouth, and Phyllis Dawson said sharply, "Not in here."
"What do you mean, not in here?"
"No cigar smoking in this apartment," she said.
(A.A. Fair, *Cut Thin to Win*)

3）though を用いて譲歩節に置き換えることができる。

(i) For the first time in hours, Johnnie remembered the bomb cigar in his pocket, though none too comfortably....

(ii) She knew one thing, though with cold terror stifling her heart. If he had been working with the X and had made a mistake, the organization could and would repudiate him....

4）if not.... という仮定表現がある。この場合、not は先行節の内容を指示し、節の代用形として用いられている（cf. (Quirk et al. (1972: 698))。

(i) ... Jake wasn't sure she had a phone. If not, they'd have to make the trip to her home. But she

was listed in the book, to his relief.
(W.P. McGivern, *Very Cold for May*)

(ii) "My dear, I hope you will get your Joe. But if not I am quite sure you will get everything else."
(M. Westmacott, *Giant's Bread*)

慣用句として用いられる more often than not, more likely than not の not は節の代用形であり、角括弧で表示されているようにパラフレーズできる (Quirk et al. (1985: 1130))。

(iii) He was found out more often than not.
[More often than he was not found out]

(iv) She was satisfied with her job more likely than not.
[More likely than she was not satisfied with her job]

同様に、Why not? という慣用句の場合も、節の代用形である否定辞が含まれているとみることができる。

(v) A : I don t want to go in.
B : Why not? (= Why don't you want to go in?)
(Quirk et al. (1972: 698))

【参考文献】
安藤貞雄. 2005.『現代英文法講義』, 開拓社
Declerck, R. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English.* Kaitakusha, Tokyo
Huddleston, R. and G. K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language.* Cambridge University Press, Cambridge
Jespersen, O. 1977. *Essentials of English Grammar.* George Allen & Unwin, London
Kjellmer, G. 1975. "'The Weather Was Fine, If Not Glorious': On the Ambiguity of Concessive *If not.*" *English Studies* 56: 2, pp. 140-146.
Quirk, R. et al. 1972. *A Grammar of Contemporary English.* Longman, London
Quirk, R. et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language.* Longman, London
Swan, M. 1995. *Practical English Usage.* Oxford University Press, Oxford
Wyld, H.C. 1920. *The Historical Study of the Mother Tongue : An Introduction to Philological Method.* John Murray, London
安井稔. 中村順良. 1984.『代用表現』, 研究社

【2007年 9 月19日受付, 9 月28日受理】

Not Used As a Clause Substitute

Shigeki Seki

This study is primarily concerned with the properties of *not* used as a clause substitute. The uses of the pro-form *not* have not been fully analyzed in the literature except those of the clauses with modal adverbs and adverbials e.g. *Possibly not., I hope not.* and *I'm afraid not.* It is proposed that there are two types of the construction with the pro-form *not*: an assertive type and a reservation type; the former constitutes the speaker's negative assertion about the content of the antecedent clause, while the latter does not constitute the speaker's negative assertion about the antecedent sentence but expresses the speaker's reservation about the adequacy of the antecedent sentence. It is shown through a large number of examples cited from novels and essays that the distinction between the two types is crucial to understand the uses of the clause substitute *not* in spoken and written texts.